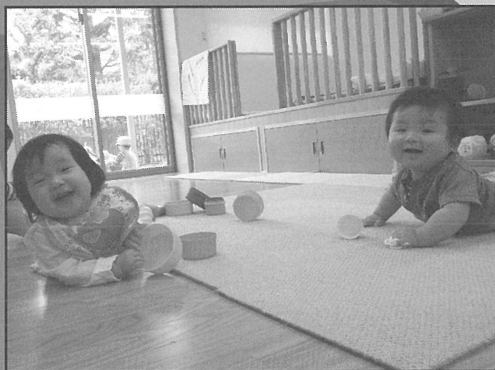


リポート こども園をつくる

—文京区立お茶の水女子大学こども園の記録—

Vol.6 / 〇歳児の心地よい園生活の実現に向けて

粕川菜穂子



文京区立お茶の水女子大学こども園の〇歳児クラス、どんぐり組は、生後四か月から入園でき、六名の子どもが生活しています。担任の保育士は二名、午前と午後それぞれ非常勤保育士が一名ずつ配置されて保育にあたっています。その他に、看護師、栄養士とは子どもの健康状態や発達、離乳食についてなどを日常的に話しながら、子どもたちが、安心できる環境の中で、よく食べ、よく眠り、よく遊んで、心地よく過ごせるように保育を進めてきました。

赤ちゃんが生まれてから二歳になるまでの間は、特に著しい成長が見られます。どんぐり組で生活する六名の子どもたちも、一人ひとり月齢によって育ちや発達に違いが見られ、動きも異なり、またその姿は月日がたつにつれて変わってきます。子どもの成長に合わせて、室内環境を変えながら試行錯誤してきた一年間を紹介します。

粕川菜穂子（かずかわ なおこ）
文京区立お茶の水女子大学こども園保育士。

よく食べ、よく眠る生活

平成二十八年四月。保育者にとっても子どもたちにとっても初めてのことも園生活が始まりました。誰もが少なからず不安と緊張の思いを抱いていたと思います。どんぐり組では、ゆったりとした雰囲気の中で子どもたちが無理なく一人ひとりのペースで園生活に慣れることを目指しました。まずは子どもが心

地よく過ごせるような生活リズムを考え、家庭での生活リズムも考慮しながら、こども園での食事や睡眠の時間を個別に組み立てていきました。睡眠は、一日の園生活の中で



▲一対一での食事風景。

一〜三回程度、個々のリズムに合わせてとっています。食事については、〇歳児の子どもにとって初めて食べ物と出会う大事な時期に、より丁寧にかかわっていききたいという思いから、保育者と子どもが一対一で食事をし、さらに、半年ほどは同じ保育者と子どもが食事をするようにしました。そして、かんんだり飲み込んだり、自分で食べたいという意欲が湧いて手づかみで食べ始めたり、スプーンを使うようになったり……と、子どもにとっての初めての経験に丁寧に向きあってきました。子どもたちにとっても、毎日決まった保育者とゆったりと食事をすることは安心感につながり、保育者と子どもの関係がつくられる基



▲「自分で食べるよ」

盤になったのではないかと感じています。

安心できる環境の中でよく食べ、よく眠るという生理的欲求が十分に満たされることが、よく遊ぶことにつながっていくと思います。

「よく遊ぶ」を実現するための環境づくり

◇遊びだすまでの姿

初めての場所・保育者に不安を見せて泣き声のオンパレードだった四月ですが、そんな中、一人ほとんど泣くことがなかったA君がいました。A君は保育室に入るや否や、棚に置かれたおもちゃを片っ端から持つては、ポイと手から離していました。

入園してから一か月がたとうとしたある日、いつものようにA君が手にした積み木と同じ物を保育者も手にして、壁を滑らせました。すると、それを見たA君もまねして壁を滑らせました。その後、棚の上や床を滑らせて、長いこと遊びが続きました。

その日を境に、おもちゃをポイとすること

はなくなり、よく遊ぶようになったのです。

A君は、片っ端からおもちゃに触れることを通して新しい環境を知ろうとしていたのかもしれない。一通り試してみたところ、面白い遊びを見つけ、隣には同じことを楽しむ保育者がいる……ここでの生活も悪くないなあと思ったのでしょうか。新しい環境に慣れるまでの姿って、泣くだけではないんだなあ、と私自身が新しい発見をしました。

◇子どもの姿に合わせた室内環境づくり

どんぐり組では、子どもが自分から見たり聞いたり、触れたり、動いたりする姿を見守り、そこから子どもが発見した喜びや面白さに保育者が共感していくことを大切にしたいと考えてきました。つまり、子どもが能動的に動きだすことができるように、子どもの姿・成長と共に、室内のレイアウトを変えたり手作りおもちゃを用意したりしながら、環境づくりの試行錯誤を続けてきました。

大きくは年に六回、おもちゃ棚の配置を変えて環境を整えました。例えば、四月は棚の片面を壁につけて配置してありましたが、子どもをつかまり立ちや伝い歩きが盛んになってきた七月には、棚を壁から離して配置しました。そうすると、棚につかまりながら歩くようになり、二、三人が棚を囲んで遊ぶ姿がよく見られるようになりました。また、棚を挟んで保育者や友達と向かいあい、いいないないばあを楽しくむようになつたのです。



▲棚を囲んで遊ぶ子どもたち。



▲壁につけてあったおもちゃ棚（4月）。

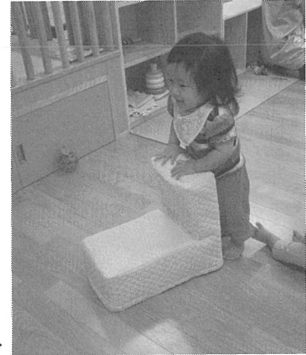
十二月頃には、六名全員の歩行が安定したことで動きが増え、また子ども同士のかかわりが増えてきたと同時におもちゃを取りあう場面も出てきました。そこで、遊びと食事の空間をはっきりと分け、遊びの空間をL字型に作りました。それまで見通しの良い一つの空間だった遊びのスペースが二つの空間になったことで、子どもたちが好きな場所で落ち着いて好きな遊びをするようになりました。

◇手作りおもちゃ

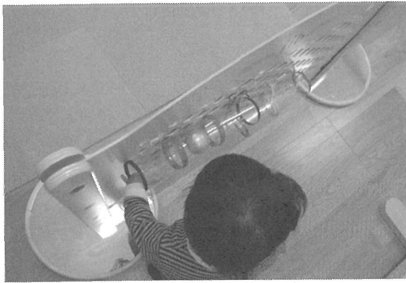
どんぐり組にはいろいろなおもちゃがあります。木のぬくもり、布の感触が味わえる自然素材のおもちゃがそろえられています。音がするもの（でも鳴り過ぎない）、手は届かないけれど見て楽しんだり不思議がったりするもの、そして、壁や床も工夫次第で遊びの環境の一つにできました。また、一年の間にさまざまな手作りおもちゃも登場しました。その中からいくつか紹介します。



▲つまむ、ひっぱるおもちゃ

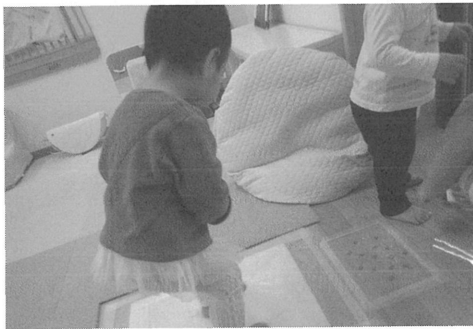
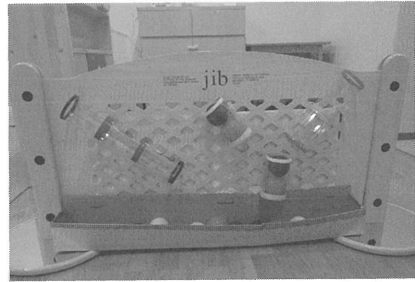


牛乳パックで作った椅子。押して歩く。▶

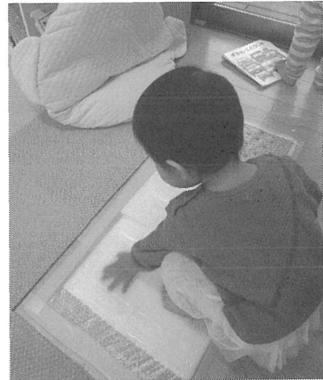


▲透明な筒の中にボールを転がして遊ぶ。

最初、右の写真のように作ったが、子どもの興味が向かない。筒の傾斜が急過ぎてボールの動きが目で見えないのではと考え、左のように傾斜を緩やかにした。



▲感触遊び — 気泡シートを触ってみたり (右)、
足で踏んでみたり (上)。



◇自然の中での「見る」「聞く」「触れる」を通じた豊かな体験

どんぐり組の保育室は、ウッドデッキを挟んですぐに園庭につながっています。ガラスドアを一枚開けると外につながる環境は、とても良いと感じています。外の景色や自然物などは、私たち大人にとっては慣れた環境であって、どんぐり組の子どもたちにとっては一つ一つの出会いが初めてになるのだなあって……と想像しながら、そんな「初めての出会い」を一緒に経験し、そつとそばで見守りたいと思ってきました。

天気の良い日は大学構内に散歩に出かけました。春はベビーカーに座りながら、ツツジやアジサイの色とりどりの花に顔を向けたり、手を伸ばしたりする子どもたち。心地よい陽光にうとうとと眠りだすこともありました。

園生活に慣れ始めた頃から、構内の広場や大学の建物の中庭で遊ぶことが増えました。ハイハイが盛んになってくると、中庭にある

緩やかなスロープを動き回り、一、二、三段のちよつとした段差も登り降りするようになりました。「登りたいけどどうしようかな、どうやるうかな……」、「そんな思いと共に見られる姿は六人六色。マンホールの上で足踏みすると音が違うことに気づいたり、落ち葉の上を歩く感触を楽しんだりと、いろいろな発見をする子どもたちの姿には驚きと感心の連続でした。

歩けるようになってからは、自分の目に映った宝物……葉っぱや石、木の実などを拾っては小さな手に握りしめながら構内を散策しました。音に反応して空を見上げると、そこには飛行機……。見た物とその時の感情を保育者に伝えたくて「あー」と声に出したり、指をさしたり、目を大きく見開いたりと全身で表現する子どもたち。そんな姿を一つも見逃すまいと思いながら、子どもたちの傍らに居続けてきました。



▲アジサイに手を伸ばす子どもたち。